

## 第5章 2007年度における調査・研究のまとめ

**調査** 2007年度には、発掘調査としては、津島岡大遺跡第30次調査（インキュベーション施設建設工事）を2007年6月～12月に、鹿田遺跡第18次調査（中央診療棟新営関連工事）を2007年9月～2008年3月にそれぞれ実施した。件数としては合計2件の発掘調査であったが、鹿田遺跡の調査地点は3箇所分散していた。立会に関しても比較的規模の大きいものが多く実施された。津島地区では、岡大西門付近あるいは津島岡大遺跡第30次調査地点周辺などで、鹿田地区では、鹿田遺跡第18次調査地点周辺そして第1次調査地点脇の地点などがあげられる。

津島岡大遺跡の調査では、現在に残る条里に合致した位置に、古代に遡る道路状の畦畔を確認できた点は、特に重要な成果といえる。周辺の立会調査でも東西方向の溝が検出されており、今後の条里の復元に関して貴重な資料となろう。さらに、調査がこれまで状況が不明確であった津島岡大遺跡の西端部付近あるいは岡大西門付近におよんだことから、微高地の広がりなどの地形復元ができた点も大きな成果であった。

一方、鹿田遺跡の調査では、新知見として、近世後半期における集落形成の新たな動きを確認することができた点があげられる。その集落に近接して検出された、船着き場の可能性をもつ入り江状遺構との同時性が確認されれば、その意義はさらに高まりそうである。今後の課題として取り組む必要がある。また、本年度の調査で、弥生時代～近世資料の拡充がさらに進むこととなったが、その中でも、中世（鎌倉時代）における集落の区画溝と判断される遺構の検出は注目される。立会調査で確認された溝は東西方向に走っており、鹿田地区西端付近で想定されている（鹿田遺跡第6次・17次・7次調査地点）屋敷地区画の問題に深く関わる資料と評価される。そのほかにも、主要な調査が集中した鹿田地区南東部の地形復元や遺跡の状況についても、新たな資料を得ることができた。

**研究** 2007年度の刊行物として、例年通り、発掘調査報告書1冊（『津島岡大遺跡18』岡山大学構内遺跡発掘調査報告第24冊）および紀要1冊（『紀要2006』）、そしてセンター報2冊を刊行した。『津島岡大遺跡18』では、弥生時代前期水田の関する成果あるいは中期への遺構の変遷などが注目されよう。紀要では、津島岡大遺跡内における土壌中のプラント・オパール分析に関する成果をまとめた報告を2件あげることができた。プラント・オパールの残存状況から津島岡大遺跡における稲作の実態を考えたものである。

**展示・公開** 特筆される点は、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター20年の発掘成果展として、「自然と人間、地中に埋もれた命の対話」をテーマにした展示会を開催したことである。会場を学外の本格的設備の整った岡山市デジタルミュージアムに求め、同博物館と共催で行うという初めての試みであった。これまで継続してきた展示会の集大成ともいえる規模の大きなものとなった。期間中（6月5日～17日）、会場は2161名の見学者で賑わい、マスメディアにも大きく採り上げられ、好評を博した。その間には、2回の講演会を企画し、本センターのみならず学内外から、千葉学長をはじめとする多彩な講師を迎えることができた。本センターだけでなく、学内外の多大なご支援・協力のもとに展示会を開催できた点は、非常に意義深いものであった。

そのほかに、例年通り、教育機関への支援として、博物館実習や中学生職場体験の受け入れたほか、鹿田遺跡第18次調査中には現地説明会を実施した。

本年度は、年度初めから短期間での展示会の準備に続き、6月以降は、調査研究員の大半が発掘調査を担当するなかで、通常業務を実施していくこととなった。発掘調査をはじめとする数多くの調査に加えて、埋蔵文化財調査研究センター設置20年に際して企画された記念事業の実施は、日常的には多忙を極めることとなったが、その成果は、本センター20年の節目の年にふさわしいものとなった。ここで総括した20年間の歩みを踏まえ、センターとして、またさらに新しい一歩を踏み出していく出発点としていきたい。（山本）